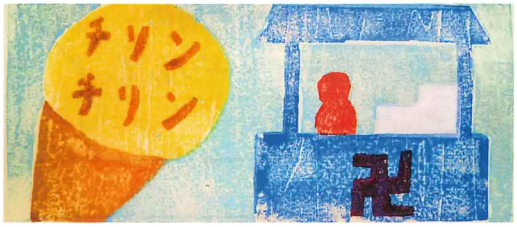
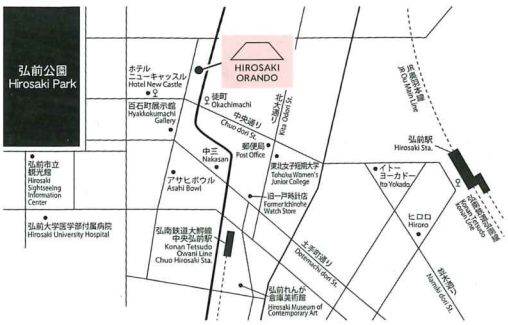
多版多色木版でつくった
弘前まんじ札展



弘前大学教育学部附属中学校３年生による
展覧会vol.7

月日　2021年　8月7日(土), 8日(日)
時間　11:00—18:00
場所　HIROSAKI ORANDO (百石町47-2)

HIROSAKI
ORANDO



〈連絡先〉弘前市学園町１－１　弘前大学教育学部附属中学校　美術科担当　蒔苗靖子
電話 0172-32-7201　FAX 0172-32-7281

ひろふのまんじ札、けるよ！

※けるよ＝差し上げますよ

昔ながらの銭湯をイメージして、
レトロな感じを出しました。

長勝寺の屋根のきれいな
曲線にひかれて作った。

20歳になったら…というあこがれ。
早くお酒飲みたい！

りんごのミラーに導かれて行ってみるがよい…。
そこは唯一無二のりんご王国、りんご公園だ！

映えスポットのハートの桜をイメージして
つくりました。見る人があきないように、
たくさん色も使いました。

弘前で明治や大正の頃に栄え、今も当時の
店が残る珈琲の、洒落た感じをイメージして、
それを醸し出した。

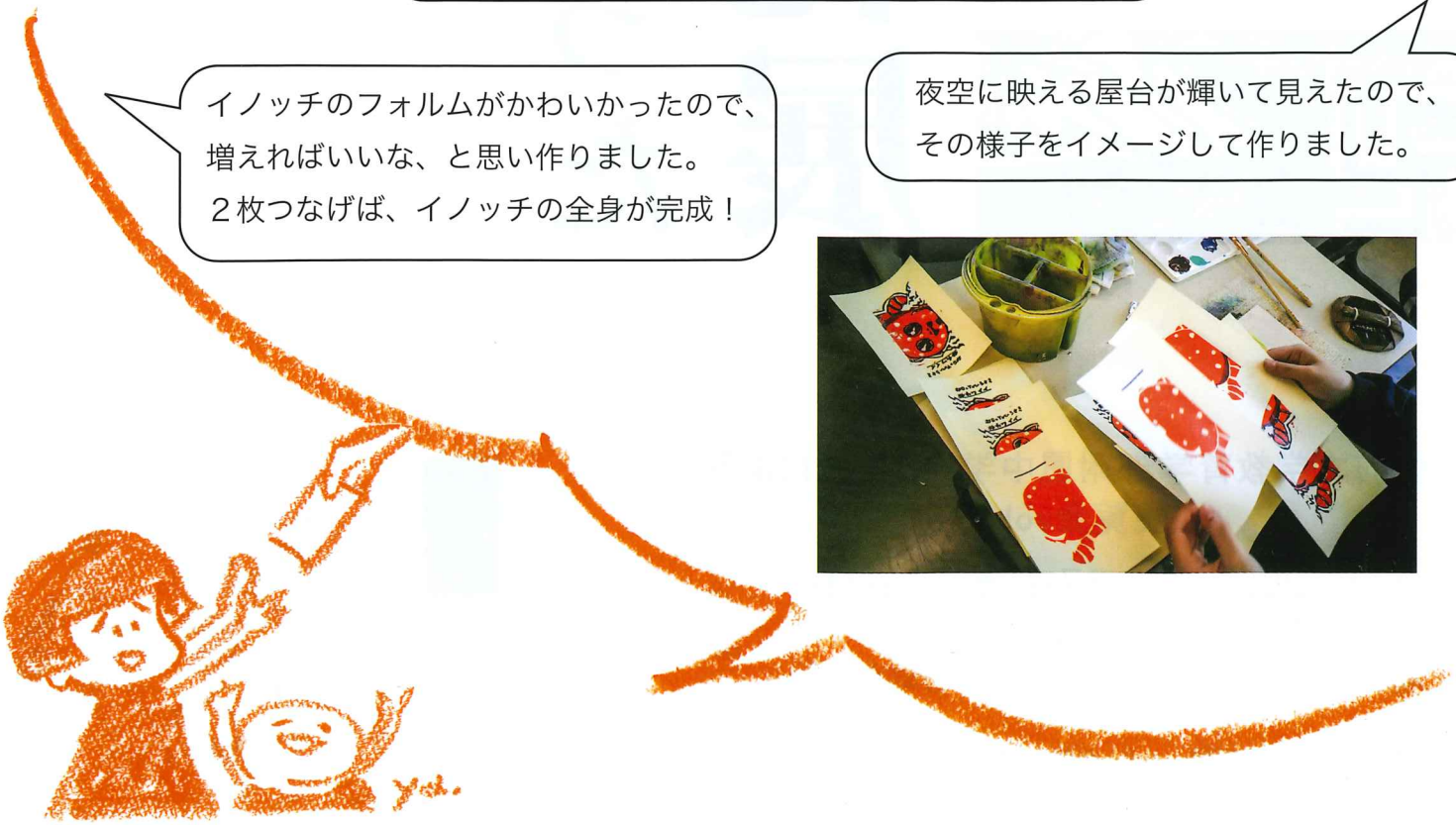
岩木山神社から見て、神社と岩木山がどちらも
見える場所の風景を多版多色木版で再現した。

弘前の代表的な建築物で、弘前の文化が少しでも
伝わってほしいことと花筏をイメージしました。

弘前で生まれたおいしい「清水森ナンバ」の魅力が、
日本全国で流行することをイメージして作りました。

イノッチのフォルムがかわいかったので、
増えればいいな、と思い作りました。
２枚つなげば、イノッチの全身が完成！

夜空に映える屋台が輝いて見えたので、
その様子をイメージして作りました。



H-MOCA コネクト

おにっこのあしあと

潘逸舟と弘前 2020-2021

2021 年 8 月 1 日（日）— 10 日（火）

入場料無料

時間｜10:00 — 18:00

会場｜ギャラリーまんなか

（弘南鉄道大鰐線　中央弘前駅舎内）

＊弘前れんが倉庫美術館から徒歩約 3 分

＊専用駐車場がございませんので近隣の有料駐車場をご利用ください

主催｜弘前れんが倉庫美術館、ギャラリーまんなか

特別協力｜潘逸舟、弘前大学教育学部附属中学校美術部、蒔苗靖子

＊令和 3 年度弘南鉄道利活用事業助成金活用事業

お問い合わせ｜弘前れんが倉庫美術館

〒036-8188 青森県弘前市吉野町 2-1　TEL：0172-32-8950

HIROSAKI MUSEUM OF CONTEMPORARY ART

GALLERY まんなか

H-MOCA コネクト

弘前れんが倉庫美術館が目指すクリエイティブ・ハブ（文化創造の拠点）にコネクト（接続）することを目的とし、当館の活動を紹介する取り組みのほか、作家の創作過程・リサーチの様子を公開したり、トーク・展示・ワークショップなどを館外で開催したりすることで、美術館と地域を繋ぎ、また多様なヴィジョンと豊かな感性に触れることができる場の創出を目指しています。

今回は現代美術作家・潘逸舟の約 1 年に渡る弘前での活動の記録を、写真やテキスト、そして作家と共に活動してきた人々の様子とあわせて振り返り、紹介・展示します。

潘逸舟は 9 歳のときに上海から弘前に移住し、高校卒業までを当地で過ごし、アーティストとしての第一歩もこの地で踏み出しました。そして 2020 年の春、弘前れんが倉庫美術館の開館に際し弘前を再び訪れた作家は、「弘前エクスチェンジ」という当館のプログラムを通じて、自らが弘前で過ごしてきた過去に再会したり、母校の中学校美術部員とリモートでワークショップを行ったりしました。中学生との活動では津軽一帯に残る「鬼」にまつわる昔話や伝説を着想のもとに、2021 年度春夏プログラム「りんご宇宙—Apple Cycle / Cosmic Seed」にて展示の作品《おにっこのちはりんごジュースの滝》を制作。そしてこの作品の設営に際し再び弘前を訪れた作家は岩木山の入山口でもある大石神社へ赴き、山中の切り株のフロッタージュを行いました。岩木山をかたちづくる峰のひとつ、厳鬼山のふもとに広がる谷間である赤倉沢の入り口に位置するこの場所には、古くから鬼の伝説が伝わります。ここで展示されているフロッタージュの数はワークショップを共にした生徒の人数と重なります。また様々な大きさや形の切り株の表面を写しとったフロッタージュは、作家の身体の動きとエネルギーを強く表しているようです。同時に、表面の炭の濃淡や、渦を巻いたり斜めに走ったりしつつ豊かに広がる切り株の模様からは、新たなイメージの可能性が示され、見る者の想像力を喚起するでしょう。

本企画では作家が弘前と関わりながら活動する途中で生み出してきた断片を拾い集め、約 1 年の活動を振り返ります。また作家の周縁で活動をともにしてきたスタッフや関係者の活動の様子も同時に紹介することで、作家を基点に周囲に広がる創造性の輪を見せる試みでもあります。